



第4学年 「変わり方調べ」 高橋 弓香子 教諭

伴って変わる2つの数量の変わり方を、和が一定、差が一定、商が一定と調べてきた単元末として、一次関数の場面を設定しました ($y=ax+b$)。表からきまりを見だしそれを式化へとつなげていく過程で、その文脈を子どもたちとどのように描いていくかについて考えていく提案でした。



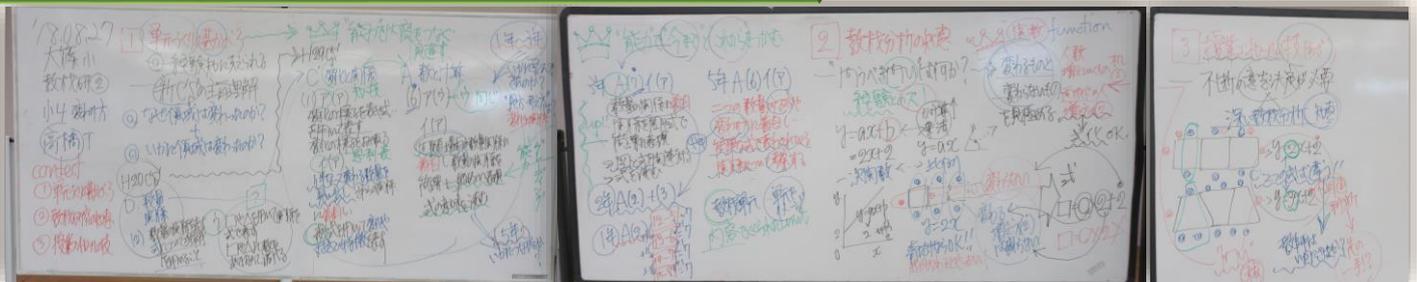
テーブルといすの並べ方の図を提示し、^Aその変わり方について既習の2段の表に表していくことできまりを見いだそうとする案と、^B図の中のいすの色を分け、テーブルの数が増えると数が増えていくいすと、テーブルの数が増えても数が変わらないいすを示し、その変わり方について3段の表に表していくことできまりが見えやすく式化が容易になるとする案が出されました。どちらの案がよいか、また、どういった代案が考えられるか、活発な協議がなされました。



能力で“今まで”と“これから”をつなぐ

現行の学習指導要領において「D 数量関係」領域であった本教材は、新学習指導要領においては「A 数と計算」と「C 変化と関係」領域に分かれた。新学習指導要領の趣旨を踏まえて単元をつくるということは、なぜ領域が変わったのか、いかに領域が変わったのかを理解し、能力で学年間の内容をつないでいかなければならない。例えば3年では「数量関係に着目し」という文言が、4年では「問題場面の数量関係に着目し」となり、具体的な問題場面の提示が必要となる。指導者はつくった単元に責任をもち、確実にその単元でつけるべき能力を身に付けさせていく必要がある。

齊藤一弥学力向上総括専門官による 指導板書



授業者の声

単に教科書の配列に沿った授業をするのではなく、単元構成を考えることの必要性を学びました。「問い」の核が何であるかを明確にし、子どもが既習とのズレに着目できるような授業に取り組んでいきたいと思えます。

参会者の声

「単元をつくる」ことが「その単元に責任をもち」ことにつながり、それこそが教師にとって大切な授業づくりの第一歩になることが分かりました。学年のつながりを見直していきたいと思えます。【東又小 藤原寛美教諭】

大篠小学校は、子どもが「問い」を生み出す授業の捉え直しからがんばっています。授業研究会は **12月4日(火)** **13時30分開始**です！ぜひご参加ください！

